

李文亮、蔣彦永

コロナウイルス告発医師の栄光と末路

日 暮 高 則

今回、中国発生の新型コロナウイルスの情報を初めて公にしたのは、武漢中心病院に勤務していた李文亮医師³⁴だ。2019年12月30日、勤務先で、サーズコロナウイルス風が検出されたことから、武漢大学医学部時代の友人医師らにSNS微信（ウィーチャット）

を通じ、「武漢華南海鮮市場でサーズ系ウイルスに感染したと見られる7人の患者がいる」と伝え、患者の肺のCT断層写真も送った。

彼はその後、「海鮮市場患者の検査結果報告を見たけど、サーズ系ウイルス陽性の可能性がかなり高い」との情報を別のSNSに掲載し、大衆の注意を喚起した。

この情報が巷を駆け巡り、騒然としたため、武漢市衛生健康委員会は翌31日、「人から人への感染はまだない。病原菌を調べ、感染ルートなどを調査中」と鎮静化に向けたコメントを発表。その一方で、年が改まった1月1日、華南海鮮市場を閉鎖した。ところが驚くことに、病毒を真っ先に世間に知らせた李医師らは評価されるどころか、「不確実な情報をネット上で流布させた」として同市公安局から訓戒処分を受けた。1月3日、李医師は公安局武昌分局中南路街派出所と呼ばれ、訓戒書に署名させられた。同文書には「あな

たの行為は社会秩序を著しく破壊するものであり、法律で許される範囲を超えている」と書かれていたという。

李文亮医師は訓戒書に署名したあと医療現場に戻され、新型コロナウイルス患者の診療に当たった。恐らくその後は激務が続き、疲労が蓄積したのであろう。1月10日前後から彼は咳と発熱症状に悩まされ、12日に入院。

2月1日に自身が新型肺炎にかかっていることを告知され、その1週間後の7日午前3時前に妻子を残して永眠した。直後に中心病院からSNS微博上で訃報が伝えられたが、あまりにも突然で「簡潔な」お知らせだったため、ネットユーザーから40万件の問い合わせや意見が寄せられたという。

中国は得てして、流行性の病気を隠したがる風潮がある。実は、17年前のサーズの時も当初、同じような隠蔽姿勢が見られた。広東省を発症地とするサーズは患者が地元で相次いで出ていたが、情報が伏せられ、制圧行動がいい加減であったため、感染患者が出国。隣の香港のホテルに泊まって重篤となって、初めて流行性の病毒が公にされた。だが手遅れで、感染者が複数の国に出国し、台湾などにも伝染し、患者を増やした。この地方政府

の隠蔽姿勢が中央にも波及し、國務院衛生部も最初は「低調に」処理しようとした。

これに抵抗したのが北京の解放軍301病院にいた蔣彦永医師（現在88歳）だ。2003年4月、時の張文康國務院衛生部長が「北京市内にサーズの患者は12人で、死亡したのは3人だ」と発表したのに対し、蔣医師は自身の病院などでの実情を踏まえて、この数字に異議を唱えた。そして取材に訪れた米系のメディアに、北京のみならず、国内全体の病気の広がりについてありのままに語った。

蔣彦永氏は、浙江省の民族資本家の子弟であり、蔣介石元台湾總統の一族とも言われる。だが、「為人民服務（人民に奉仕する）」の志強く、国民党には従わず、1952年に共産党に入った筋金入りの黨員だ。それだけに旧幹部として文革時代には批判を受け、下放させられ、労働改造所にも送られた経歴を持つ。1972年に解放軍病院に復職し、外科の専門医になり、少将の階級も与えられたが、徹頭徹尾医師の良心を忘れなかった。

蔣医師の告発により、胡锦涛国家主席下の党中央はのちに姿勢を改め、衛生部長を解任、真実を明らかにし、徹底的なウイルスの撲滅、蔓延阻止の作戦を展開した。蔣医師はこれによって国内ばかりでなく、国際的に高く評価された。昨年、天安門事件30周年に当たり、習近平主席や党中央に向けて、6・4事件（天安門事件）の名誉回復を要求する公開書簡を出すなど、その後も信念に基づいた行動を貫いている。

今回、李文亮医師の告発が契機となって、党中央の姿勢が変わった。政治局常務委員会

は春節期間にもかかわらず、1月24・26日に会議を開き、新型コロナウイルスの感染防止を目指して徹底した対策を取ることを決めた。新華社通信によれば、習主席は会議の席上、「初期の対応に問題があった」と反省した上で、「国を挙げて感染防止に取り組み」と表明したという。その直後の27日に、「党中央新型コロナウイルス肺炎対策工作指導小組」組長となった李克強総理が武漢の病院を訪れたほか、習主席自身も北京の医療施設を訪問し、「感染を抑える戦いは人民戦争、総力戦だ。断固打ち勝たなければならぬ」と呼び掛けた。3月10日には自身も武漢を訪れている。

李文亮氏は医療従事者としての務めを果たし、犠牲となったのだから、当局も哀悼の意を表さざるを得ない。国家衛生健康委員会のスポークスマンは「李文亮医師は新型コロナウイルスとの戦いの中で自ら感染した。全力で治療に当たったものの、不幸にして救えなかった。衛生健康委は深い哀悼の意を表し、ご家族に対し衷心からお悔やみを申し上げる」とのコメントを出した。3月5日には、李医師に対し「疫情防控工作先進個人（流行性疾病预防の先進的工作者）」の称号も授与している。だが、称賛のコメントや称号を与えたものの、党中央は心底から李医師の行動を歓迎したものであろうか。

共産党の幹部は自身の評価、昇進に関わるだけに、なるべく暗いニュース、情報は公にしたがらない。地方幹部は特にそういう傾向があり、細菌、ウイルスなどは目に見えないものは隠しやすいから、当初、打ち消しに躍りになった。その後、党中央が方針転換し、

李医師は称賛の対象になるが、これは所詮一時の現象でしかなかった。間もなくSNS上で李医師絡みの文章は削除され、顔写真もなくなつた。上海の「界面新聞」が李医師の妻をインタビュー取材した記事も削除された。そのくせ、武漢市公安局が李医師に出した訓戒書はネット上に掲載されたままだ。

中央指導部の対策の遅さを非難するような内容もSNS上から消去された。党政府への反発がネットを通じて拡大し、人民の声が集し、行動に出ることを恐れているからだ。共産党は、1989年春の天安門広場の民主化運動が胡耀邦元総書記死去後の追悼行動に端を発したことを忘れていない。李医師の死去が同じような事態を引き起こしかねないと判断したのはいわば自然の思考経路である。

中国には「秋后算帳」と言う言葉がある。事態が収まった後、損得の帳尻を合わせるという意味で、事態に便乗して調子に乗った人間にのちのち報復を与えるという含意もある。党の秩序を無視して、その筋の専門家が勝手な振る舞いをいつまでも続けることが許される余地は今の中国にはない。今回も李医師の姿勢を表面的には評価しつつも、党の秩序、社会の秩序を乱す行為は歓迎しないという態度を明確にしている。

実は、新型コロナウイルスが出たこの時期、サーズウイルスの告発者、蔣彦永医師の「所在」が分からなくなっている。蔣医師の発言は国際的な影響力を持つだけに、西側メディアが今回の件で反響を取るために、彼の許に殺到することが予想された。このため、党中央が彼の自由な発言を警戒し、ひそかに「軟禁」して

しまったのではないかとこのうわさもある。

李文亮医師は感染し入院した時に、ネットニュース「財新網」記者の取材を受けていた。彼はそこで、「みんなが真相を知ることが最も重要で、私の名誉が回復されるかどうかなどは問題でない」と、疫病退治には情報公開が絶対に必要だと主張している。新型コロナウイルス告発に及んだ彼の思考が単なる医師の枠を超えたところにあつたことを物語る。

ラジオ・フリー・アジアによれば、1989年民主化運動の指導者である王丹氏も「問題の本質は言論の自由が保障されているかどうかに関わっている」と語った。王氏は「私が見るところ、李文亮医師は英雄でなく、問題の本質でもない。彼がこの疫病に遭遇し、提示したのは中国に言論の自由がないということだ」「彼の死を哀悼する大きな高まりができるなら、それを言論の自由を求めるうねりとしていくべきだ」とも強調した。

米系メディア博訊網は「李文亮の死は中国の民衆に、言論表現の自由を失うと安全、生存権まで失うことになる」と教えている」と指摘。李医師が最初にSNSに発信した内容に地方当局が素直に耳を傾けていれば、もっと早く新型コロナウイルスに対処できただろうし、彼は死なずに済んだのではないかとこの見方を示す。そして、李医師が息を引き取った日を「すべての人が本当のことを話す日」「国家の言論自由の日」とすべきだと提唱している。新型コロナウイルスへの戦いが今後、政治運動まで引き起こすのかどうかは分からないが、不気味な可能性を孕んでいる。(了)